

趣旨説明——身体論における比較思想的考察の可能性——

合 田 秀 行

比較思想学会第四十五回大会（於日本大学）のシンポジウムにおいては、身体論をテーマに設定し、現代における瞑想・祈り・労働の意義などに着目しつつ、身体を多角的に考察するべく副題を添えた。基調講演において、木村清孝先生は「修行と身体——仏教の思想を手がかりとして」と題して、仏教を中心としながら、東洋思想を俯瞰した立場から修行と身体の関係について言及され、近代以降の意識と身体という二元論的構造を越えた修行という場からの考察が試みられた。

さらにシンポジウムでは、キリスト教、仏教、神道という三分野の研究者の視点から、思弁的神秘主義、東洋的伝統における修行法、ソマティックな心身統合などの側面を巡って比較思想的見地からの報告がなされた。具体的なキー・パーソンとしては、シモーヌ・ヴェイユ、D・H・ローレンス、無著（アサンガ）、玉城康四郎、山崎闇齋らが挙げられる。

身体論とえば、湯浅泰雄によって発表された『身体——東洋的身心論の試み』（創文社）は、後に *The Body: Toward an Eastern Mind-Body Theory* として英訳された。現在の『身体論——東洋的身心論と現代』（講談社学術文庫）は、英訳する際に手が加えられた部分を忠実に伝えるために英語版に基づいて構成されている。この中では、東洋思想における身体論のみならず、ベルグソンやメルロ＝ポンティの視点から、東洋的身体論の現代的意義が比較思想の観点から論じられた。本書は東洋的な身体論の先駆的著作と位置付けられよう。さらに、「市川身体論」とも称されるように、市川浩による『精神としての身体』（講談社学術文庫）や『身』の構造——身体論を超えて』（講談社学術文庫）などにおいて、独自の身体論が試みられ、特に「身」などの日本語の表現を用いて考察が掘り下げられてきた。現代においては、むしろ「心の時代」と唱えられて久しいが、

その一方において身体論の視点、強いて言えば、身体も含んだ全人格的な観点が一層注目を集めつつあり、ソマティック心理学(身体心理学)やホリスティック医学の分野でも、関心の高まりが看取されるし、関連分野における動向は目覚ましいものがある。すなわち、身体から心へのアプローチの重要性が、さまざまな知見から語り出されている。そのような潮流の中で、東洋的な身心一如の思想、「非脳」の身体的インテリジェンスの観点、そして、そのような視座に基づく東西のさまざまな身体技法(ソマティックス)が国内でも紹介され、広がりを見せている。

例えば、仏教の八正道の一要素である念(śam)や止観(samatha-vipassana)に依拠して、アメリカを中心に、宗教色を排除する方向で構成されたMBSR (Mindfulness-Based Stress Reduction) と呼称されるマインドフルネス・ストレス低減療法もその一端であろう。日本においても関連する学会や協会が設立される一方、世界的な企業の社員教育などにも導入されている。ブッダ以来の冥想(瞑想)の伝統は、脳科学の急速な発展による実証的研究という背景も踏まえた上で、現代でも脈々と継承されている現実は見逃せない。

さらに、今回、この身体論というテーマを選定するに際しては、本学会の第二代会長であった玉城康四郎先生の業績を再検討したいという意図も伏在していた。基調講演者である木村先生は、玉城先生との法縁が深い。また、筆者自身も長きにわた

り、学問と行道の両面にわたり薫陶を受けてきた経緯がある。玉城先生は全人格的思惟という独自の表現を用いて、一般的に対象的思惟との二つの思惟のあり方を追求され、ご自身も全人格的思惟を実践しつつ思索を深化させてきた。比較思想の視点からも、全人格的思惟に関する多くの論考を残され、その成果は『比較思想論究』(講談社)という大部な著作に集大成されている。また、玉城先生は、東京大学、東北大学の教授を経て、本年度の大会開催会場となった日本大学文理学部で長く教壇に立たれた経緯もあり、先生の業績において、とりわけ身体論や修行論に関して改めて顧みる機会とした。

玉城先生が提唱された全人格的思惟は、身体を含めたホリスティックな営みに他ならず、それは禅定や冥想と換言し得るが、より広い観点ではキリスト教や神道における黙想や祈りという行為とも深く関連してくるであろう。それぞれの伝統における身体観を踏まえながら、冥想や祈りの意義を現代的な視座から考察できれば有意義であると考えらる。

二十世紀における「心の時代」は、二十一世紀を迎えて「心身統合の時代」へと進展しつつあると指摘できるかもしれない。心身統合の前提として、心と切り離された身体ではなく、全人格的営みという文脈において、身体を比較思想の観点から探求しようとする試みは、大いに意義があると思われる。

(こうだ・ひでゆき、仏教学、日本大学教授)